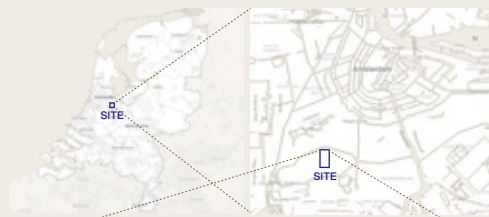
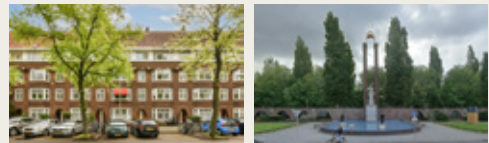


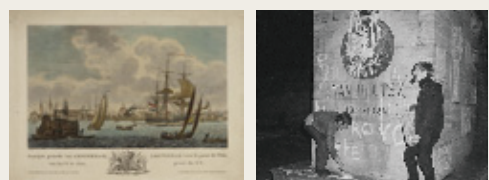
敷地 オランダ、アムステルダム南地区。ミュージアム広場から近い住宅地。



ふたつの建築 住宅とモニュメント。これら同じ植民地主義の歴史の、異なる帰結である。



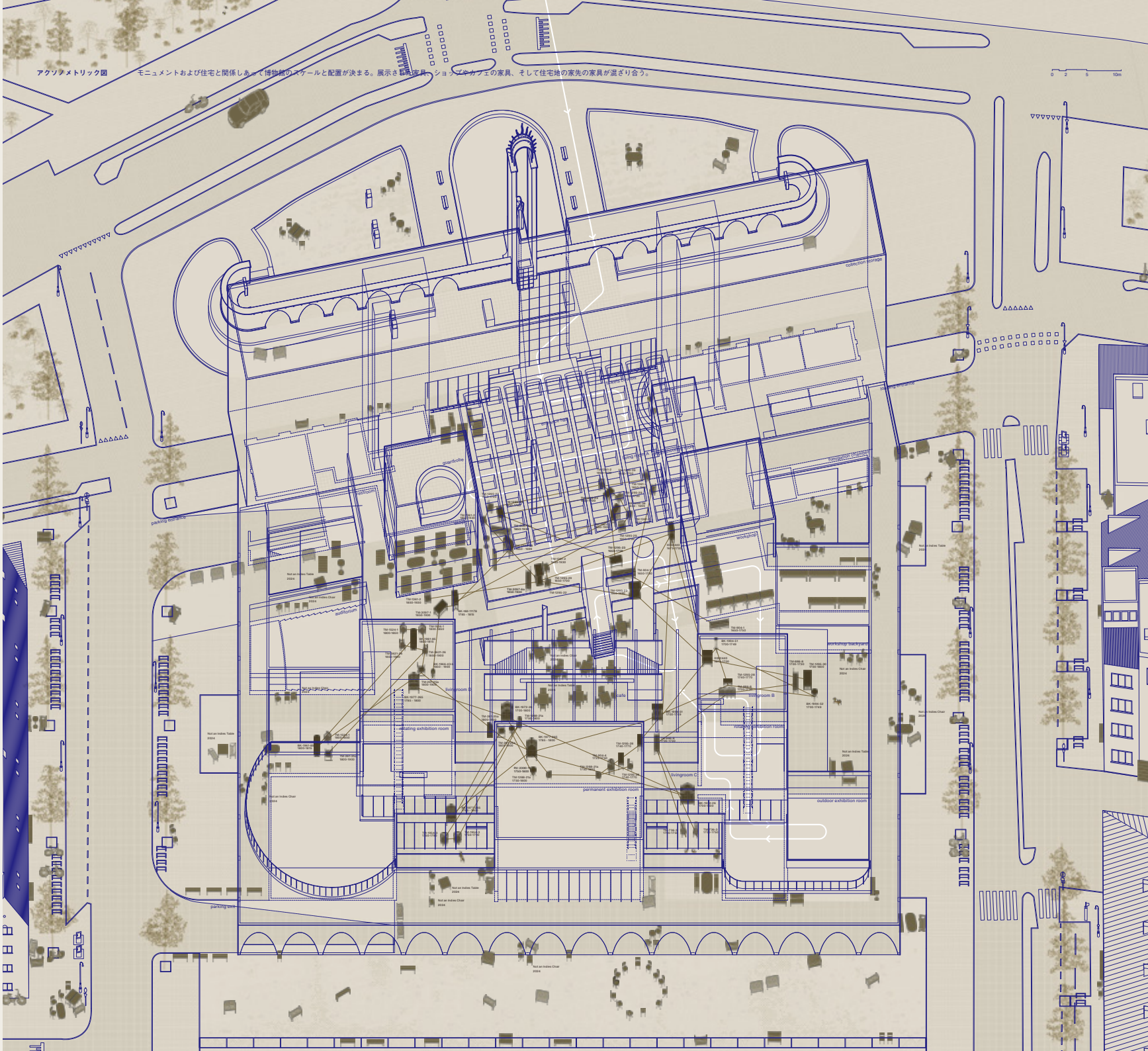
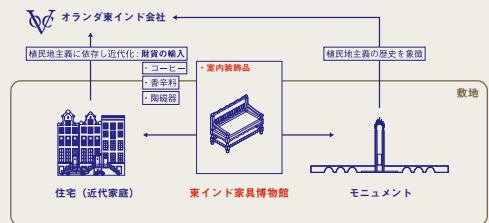
a — 住宅
家車や家風といった住宅の概念は、植民地貿易を財源として達成された。
b — Monument India - Nederland
オランダ東インド植民地の歴史を表すもので、子や論争の焦点となってきた。



東インド会社時代の財貨の輸入。アムステルダム市立アーカイブ、1782年
植民地主義に対する爆撃子ロの写真。アムステルダム市立アーカイブ、1967年

東インド家具の博物館

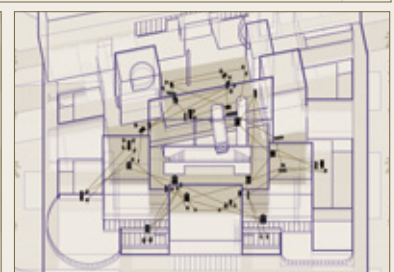
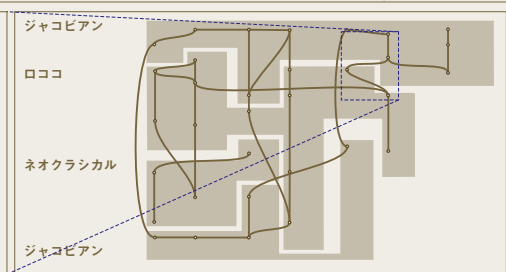
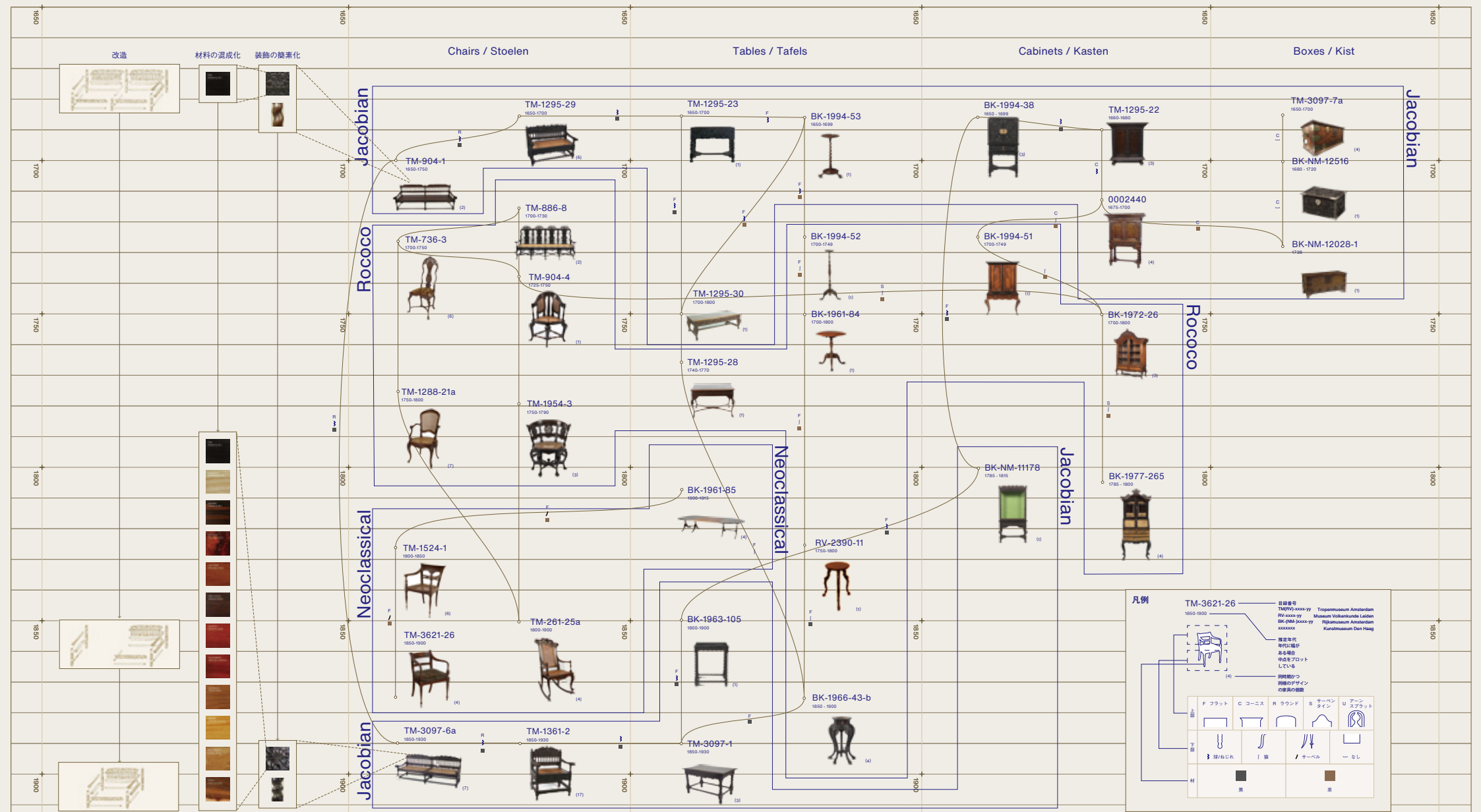
東インド家具は、日常的でありながら象徴的であり、住宅とモニュメントのあいだに中間的な場所をつくり得る。両者をより多義的な理解へと開いていく、家具の博物館。



アクゾメトリック図 モニュメントおよび住宅と関係しあう。博物館のスケールと配置が決まる。展示される家具、ショールームの家具、そして住宅地の家先の家具が混ざり合う。

0 2 5 10m





異なる様式の間でも、部位ごとに特徴を共有しながら変化したことが分かる。

4つの様式に分かれながらも、隣り合う家具同士は似ている。

4つの様式に対応した、家具の展示室を円環状に数珠つなぎに並べる。

似た家具どうしが視線・動線によって繋がるように家具展示室の配置・家具の配置を決める。

家具展示室を補完するように、他の諸室を配置する。

